# わいまた NEWS

ロイマタとはニュージーランド先住民のマオリ族の間で愛と友情の絆を表すお守りの名前です。

第９号

【発行】 2007年9月30日

特定非営利活動法人あい・ぽーとステーション

〒106-0031 東京都港区西麻布 2-24-25-509

TEL 03-6657-8539 FAX 03-3499-8539

E-mail:station@ai-port.jp

URL:http://www.ai.port.jp

子育て・家族支援者養成講座事務局


## 千代田区 三級二期支援者誕生

八月二十七日(月)、千代田区子育て・家族支援者養成講座(三級)第二期の認定式が行われました。十六名の認定者とお一人の準認定者が誕生しました。千代田区から、教育委員会の若林尚夫教育長、児童・家庭支援センターの吉野紀子センター長、新治博係長、小宮担当、あい・ぽーとから大日向雅美代表理事、新澤誠治代表理事が出席し、修了生の皆さんの認定を祝福しました。

式のはじめに若林尚夫教育長からご祝辞として「認定おめでとうございます。大変な暑さの続くなか毎週一回、のべ十日間、四十五時間の講座を無事修了され、今日の認定式を迎えられたことにお祝い申し上げるとともに、講座を支えてくれたあい・ぽーとステーションの皆様に感謝申し上げます。千代田区の次世代育成支援行動計画の『子どもと親の育ちを支えていこう』という基本理念に基づき、支援者の養成が不可欠であるという提言に応える目的から養成講座を始めました。一期生の方々はすでに子育て・家族支援活動にたずさわっていただいている。二期生の皆様にも、子育て日本一を目指す千代田区のバックアップをお願いしたい。」と期待のお言葉をいただきました。

千代田区 若林尚夫教育長

続いて、あい・ぽーとステーションの新澤代表理事から、受講生お一人お一人に認定証が授与されました。やや緊張した雰囲気でありましたが、皆様のお顔は自信に満ちていました。

吉野紀子センター長からは、「子育て真っ最中の方、初めて男性の方も講座を修了され、うれしく思います。一期生の方々には、児童館の業務補助や小学校での障がいをお持ちお子さんの生活学習指導支援員、一時預かりの託児など責任を持って活動していただいており、たいへん好評で、我々としても鼻が高い。二期生の方々もよろしくお願いします。」とエールを、本講座世話人代表の汐見稔幸理事は、残念ながら出席はかないませんでしたがビデオレターで認定者の方々へ次のようなメッセージが届けられました。「なかなか厳しい講座であったと思います。子育て・家族支援という仕事は、歴史の中では始まったばかりだが、家庭で子育てをしている孤独な親は増えており、いずれ専門性が要求されるようになり、給料も補償されるような時代が必ずやってくる。皆様は、その時代の最初のスタートにたった人たちであり、裏を返せばいい仕事をすれば後に続く人がでてくるということである。講座で得た知識やノウハウを活かしながら、親たちに還元していってほしい。是非がんばってください」。

最後に大日向代表理事より、「講師としてお伝えできることには限界があるが、皆様がお書きくださったレポートを全部読ませていただき、これほど深く真摯に受けとってくださったことにお礼申し上げます。講座中の一時保育実施をはじめとして、講座を支えて下さった千代田区の方々に心から感謝いたします」と、閉会の挨拶がありました。(伊藤)

## 浦安市養成講座二級開講

今秋、浦安市で「子育て・家族支援者」二級養成講座が十月三日(水)から十二月十二日(水)の日程で開催されます。二級講座は、自宅や希望家庭等での一時保育、新生児、病後児及び緊急時の宿泊が伴う保育など柔軟な保育ができる人材や子育てケアマネージャーの養成を目的としたものです。

開講に際し、こども家庭課子育て係の本田恭代係長に開講前のお言葉をいただきました。

「今秋、浦安市では、二級講座を開講します。すでに実施している二回の三級講座では、八十九名もの認定者が誕生し、多くの方が地域の子育て力となり、支援者さんとして活躍しています。しかしながら、子育て世帯の中には、多様なサービスを望まれる方や深刻な悩みを抱えた方も少なくないことから、更に高度な知識や技術を習得した支援者の養成が必要となったわけです。 病後児保育、新生児保育、緊急時のお泊り保育や、子育ての相談や各家庭のニーズに合わせ子育て支援メニューを作成する子育てケアマネージャーなど、様々なケースに対応できるよう、カリキュラムを組んでいきます。二級認定者となられた方は、地域に、よりきめ細かな子育て力となって浸透し、広がっていくこと切望します。また、そのことが、起こりうる深刻な問題を、未然に解決できる糸口になれることを期待しています。活動の場は、ファミリーサポートセンター事業の拡充事業として位置づけ、まかせて会員の病後児保育、お泊り保育版として活躍していただくことや、子育てケアマネージャーとなった方は、子育て支援センターに常駐のアドバイザーとして活動できるよう調整しています。これら、支援者の方々の意欲と行政での環境づくりとで、官民が協働で地域の子育て力向上を図っていくことが浦安市の子育て行政を支えています。 二級認定者の誕生を期待しています」。

# 全国自治体職員向けプロジェクト開催

住友生命創業百周年記念事業『未来を築く子育てプロジェクト』助成事業として、〈全国自治体職員向けプロジェクト〉の第一回目研修が、九月七日(金)、八日(土)の二日間にわたって行われました。第一回目のテーマは「子育て家庭・親のニーズを汲み取ろう」です。 早朝、大型の台風が関東地方に上陸したという状況にもかかわらず、北海道から沖縄まで、全国から各自治体で子育て支援行政にご尽力されている方々三十六名が参加されました。

開講にあたり大日向雅美代表理事から「あい・ぽーとでは、地域の子育て支援の人材養成に力を入れてきたが、そのためには自治体とのコラボレーションが欠かせない。今回、住友生命様のご助成を頂き、この研修が実現できたことに深謝します」との挨拶がありました。また、開講式にご臨席いただいた住友生命調査広報部の古河久人部長から「たくさんの方々が受講され、大変な熱意を感じます。住友生命では『未来を築く子育てプロジェクト』を通して、安心して子育てをできる街づくりのため努力しています。本研修が皆様のために有意義なものになることをお祈りします。」とご挨拶をいただきました。

住友生命　古河久人調査広報部長

続いて、新澤誠治代表理事より、「地域社会の子育て支援を担っていただくのは職員の方々。何を求められているかの展望を持ち、子育て支援の担い手の育成、行政とNPOとの協働化を進めるなど、研修を活かして地域の中でお力を発揮して欲しい。」と期待を込めたお言葉があり、一日目の研修がスタートしました。

新澤誠治代表理事

## …研修1日目…

はじめに汐見稔幸理事・大日向雅美代表理事から、「NPOが自治体の職員を迎えて研修を行うことは初めてではないだろうか。この意義は大きい。はじめに、皆様がどのような動機でこの研修に参加されているのか、それぞれの自治体で抱えている子育て支援の課題など、自己紹介をかねて教えていただきたい。」との提案で、受講生の方々の手にマイクが回りました。それぞれ熱弁を振るっての途中、マイクは、住友生命調査広報部の井上小太郎次長に。「自治体の方がどういう面でご苦労されているか、研修に参加して何かお手伝いできることはないかを探りたいと思っています。」とのお言葉がありました。汐見理事が、「この研修のひとつの意義として、自治体の方々の交流がある。二日間の研修の間に、是非交流を深めていただきたい」とまとめ、昼食となりました。

午後の最初の講義は、厚生労働省の度山徹政策企画官に、「国の施策から考える子育て支援」というテーマで、ご講義いただきました。急速に進行する少子化の背景と少子化対策、人口構造の変化を展望した新たな少子化対策、「ワーク・ライフ・バランス」実現の重要性など、現在行われようとしている国の施策について、分かり易く解説していただきました。

続いて、汐見理事は、「子育て支援の理念と目的および現状における課題」というテーマで講義。「子育て支援は持続可能な社会づくりのステップである。親が抱えているニーズに応えていくことが子育て支援。支援者はニーズを読み取ることが課題で、自由でフランクなコミュニケーションの場をつくり、多様な親のニーズにきめ細やかに対応することが必要である。保護者のデリケートな心情を理解して専門的に対応できる人材をきちんと確保し派遣する。次世代育成計画を周知し、国のさまざまな支援事業に目配りして財源確保に当たる。 自治体の職員の一員という自覚を超えて、新しい支援策を市民と協力して提案するようなスタンスが大事」等の内容の話でした。

次いで、高崎経済大学の大宮登教授の講義のテーマは、「子育て支援とコミュニティ～家庭と地域の教育力再生にむけて～」。先生ご自身がお二人のお子様を育てながら実感されてきた、子育てをめぐる次世代育成環境の歪みについてのお話から始まり、少子化で、地域のコミュニティが崩壊した状況だからこそ、子どもが集団で集まる場所を確保するために努力しなければならない。地域住民が主体となる参加共同型の地域社会を作ることが、子育て支援の仕組みづくりに非常に重要であり、行政の方には地域の活動をプロデュースする役割が求められる」等ご講義いただきました。

一日目の最後は、株式会社カミテの上手康弘代表取締役社長に、自社で取組んでおられる両立支援についてお話いただきました。「育てた従業員に育児や介護で退社されるのは会社の損失、従業員の能力を充分に発揮できるようにする事は会社の責務、従業員のニーズに応えたい」という社長の理念を語っていただきました。社員が仕事と子育てを両立させることができ、社員全員が働きやすい環境をつくることによって、全ての社員がその能力を十分に発揮できるようにするために策定された行動計画について、詳細にご紹介いただきました。

汐見理事・大日向代表理事

厚生労働省　度山徹政策企画官

㈱カミテ　上手康弘代表取締役

高崎経済大学　大宮登教授

研修一日目の最後に、夕食とその後「懇親会」が行われました。住友生命の橋本雅博常務取締役に乾杯の音頭をとっていただき、澤春生上席部長代理、井上小太郎次長、宮川元則調査役、二日目の講師である大妻女子大学の岡健准教授とNPO法人市民活動センター・ハンズオン埼玉の西川正副代表理事、あい・ぽーと両代表理事、等々を囲んで、自治体の方々の積極的な交流が行われました。

住友生命　橋本雅博常務取締役

## …研修2日目…

二日目の最初の講義は、「世界の子育て支援の潮流」というテーマで富士通総研・経済研究所の渥美由喜主任研究員。世界各国を巡り、ご自身の足で体感されたご研究について、詳細なご報告いただきました。

諸外国の家族政策や福祉国家観について、北欧諸国の『普遍的福祉国家』、フランス語圏諸国の積極保守的福祉国家』、イギリスの『市場重視型福祉国家』、日本の『消極保守的福祉国家』に分類し、出生率や少子化対策との関連についてご説明。企業の両立支援策、とくに仕事と育児を両立させる労働雇用環境に関しては、ヨーロッパ大陸諸国では、公共政策として国・地方自治体が中心となってワーク・ライフ・バランスのためのサービスに取り組んでいること。特に保育・介護の基盤整備は行政主導で行われ、国・自治体の責任として広く定着している等々、企業のワーク・ライフ・バランス施策のご説明にも、参加者から高い関心が寄せられていました。

富士通総研　渥美由喜主任研究員

## …グループワーク…

二日間の講義、懇親会などの交流を受けて、岡健准教授、西川氏を討議リーダーにお迎えして、自治体の方々にグループワークに取り組んでいただきました。五人から六人のグループで、いかに住民のニーズをくみ上げて施策へとつなげていくかを、お互いの情報交換も含めて学んでいただくのが狙いとのこと。やや高まった緊張感をほぐすアイスブレークをかねて、各自の「偏愛マップ」の作成から始まりました。ご自身が愛してやまないものをプロフィールとして紹介するワークを、まず一対一で。次いで時間内にグループの他五名全員に、それぞれの“人となり”を理解してもらうワークへと展開。聞く側は、相手の「偏愛」に協調することで、傾聴力を高めるのも狙いのひとつとのことでした。

その後、それぞれの自治体において子育て支援に関わる課題を抽出し、百個を目標に模造紙に書き込んでいきました。グループ内で討議してカテゴリーに分類した後、自治体職員という立場を忘れて、“私”という立場で重要度のランキングを。まとめとして、グループ内で討議を重ね、それぞれの自治体の状況や支援への思いの違いが、重要度に表れるなど、グループ毎の発表はおのずと熱の入ったものとなりました。

大妻女子大学　岡健准教授

ハンズオン埼玉　西川正副代表理事

岡先生から「情報を出し、話し合いを通して収束していく作業をバブルダイアグラムという手法でご説明いただきました。意見を共有する土俵をつくることが“関わり”をつくる上で非常に重要であることを学んでいただけたと思います」とのご助言。

西川先生から「街づくりの中心にいる自治体の方が、住民とのコミュニケーションのあり方を転換することが大きなテーマだと思う。行政として“私”を出せない状況におかれることも多いと思うが、職場で課題を共有化し、仲間を増やしチームで仕事をする。“私”という立場で対話を繰り返すことが、住民の立場にたつことにつながり、行政の強いメッセージを住民に伝えることができると思う」との提言。

二日間のまとめとして、大日向雅美代表理事から「研修で得られたことを地域に帰ってどう活かせるか。国が提供するのは屋台骨。地域の住民ニーズに応えるのが各自治体の仕事だが、まず半歩先を見通した施策から。あまり先回りしすぎると、住民がついてこなくなる危険性もときにはある。市民ニーズをデータに基づいて提言し、首長に子育て支援を理解してもらうなど、行政担当者に求められる課題は多い。是非第二回、三回の研修にもご参加いただいて学んでいただきたい」との激励をこめたメッセージが。また、二日間に亘ってご参加下さった住友生命調査広報部の澤春生上席部長代理からも「研修を受けて、地域にお帰りになって、成果を充分に発揮していただけるようお祈りします。住友生命としても、皆様のお力になれるよう努力していきたい」とのお言葉をいただき、無事閉会となりました。

住友生命　澤春生上席部長代理

受講者の方々からは、研修が意義多いものであったと共に、あい・ぽーとのスタッフのもてなしに労いのお言葉もたくさんいただきました。第一回目の研修を無事終えてホッとすると共に、第二回の研修もスタッフ一同、より一層心を込めて準備を尽くしたいと思います。（伊藤）

## 自治体職員向け研修・今後の予定

第二回：十月十二日（金）～十三日（土）
テーマ「市民・NPOとの協働を進めるために」
第三回：十二月七日（金）～八（土）
テーマ「わが市・わが町にふさわしい子育て支援を」

# 浦安市第七回バックアップ研修

浦安市第七回バックアップ研修が九月三日（月）、二十六名の参加のもと行われました。支援者の皆さんの活動状況報告では、「特別に支援の必要な子どもを連れての外出は慎重になると共に勇気がいる。」「実際男子トイレでパニックを起こしてしまい慌ててしまった。」等、障がいを持った子どもを支援する際の疑問や悩みが率直に語られました。一方、「軽度障がいの為、何も出来ないと親から説明を受けていたが、昼食を準備する際、冷やし中華の盛り付けを一緒にすることが出来、親御さんも感激された」などの嬉しい報告もありました。周到な準備の大切さと共に不測の事態に対応できる想像力や心を込めたサポートが子どもの成長に立ち会う喜びにつながることを気付かされました。

大日向雅美代表理事から、「さまざまな価値観が溢れる時代にあって、支援者の皆さまが、『子ども達は確実に成長していくものである』という、当たり前のようで難しいこの本質を大切にしつつ、日々の課題に向きあっておられる姿を嬉しく感じています。固定観念に、捉われない心を持ちながら、子ども達の成長を見守り、親御さんとのコミュニケーションを大切にして下さい」とのエールがありました。皆さんが真剣に頷く姿が心に残るひと時でした。（佐藤）

# 浦安市第八回バックアップ研修

九月十八日（火）、第八回浦安市バックアップ研修が、二十九名の参加のもと行われました。

講師に汐見稔幸理事を迎え、一時保育でお預かりする子どもの自律としつけを中心に、助言がありました。

まず「三歳児の男の子の排泄について」、どこまで手助けすればよいのか、自立との関連でとまどいがあるという意見がありました。これに対して汐見理事から、「最近では、排泄の自立が遅れ気味で、紙オムツが当たり前になってから、昔に比べて半年は遅れているというデータもあるとのことですが、『無理に外さなくても、そのうちに…』と考えて、特にしつけをしなくなった風潮も影響している。排泄のフォローは、まずご家庭でどのようにされているか事前にお聞きしておくと共に、どのようにしたらオムツが早くとれるか、排泄の自立についてアドバイスすることも支援の一つとして大切である」という助言がありました。

次に最近多い「子どもの頻尿」の問題に対して、「生まれつき神経の働きが過敏で我慢出来ない場合と、日常生活でいつも緊張度が高く、ストレスから陥る場合の二つに分けられるそうです。一時保育では、子どもたちも緊張感が高まった状態にあるのだから、トイレを我慢させず、頻尿に付き合って、安心させることが大切」との助言。

また「ハイハイの仕方がおかしい」ことや「三、四歳でおしゃぶりをしている」などの報告もありました。汐見理事からは、「発達の過程は個人差が大きいので、正しいハイハイの方法とか遅れているという判断をするのは避け、むしろ、その子の持ち味を尊重し認めるという視点から、保育を行うことが大切である」というお話がありました。参加者の皆様が熱心に受講され、とても有意義な一時でした。（松本）

# 札幌市バックアップ研修

八月二十二日（水）、大日向代表理事を講師に、札幌市第五回バックアップ研修が行われました。札幌市子ども未来局子育て支援部から、吉田博子育て支援課長、高橋由紀子子育て支援総合センター課長、榊富士子センター係長が出席され、支援活動の課題を検討する機会を得ることができました。札幌市の皆様の熱意と温かさを肌で感じる有意義な時間となりました。（佐藤）

## スタッフから

子育て支援の現場で、皆様方が意欲的に心を込めて活動されているご報告を頂くたびに、皆様のご活躍に心を合わせ、その喜びや、時に困難を共有できる幸せを感じています。これからも皆様がますますお力を発揮できますよう、頑張って参ります。養成講座が新たに始まる秋。学びの秋だな～。なんだかワクワクしてきます。（佐藤）

十月から港区では三級、浦安市では二級の養成講座が開講します。いつも熱心な受講生の皆さんからたくさんの元気をもらっています。また、新たな出会いがとても楽しみです。（松本）

八月、千代田区子育て・家族支援者三級の二期生が認定され、すでにいくつかの活動をお願いしています。先日事業主の方から、以前からお願いしている方（一期生）も新しい方（二期生）もとてもよくやっていただいているという、大変うれしいお言葉をいただきました。この場をかりて報告させていただきます。（伊藤）